

Title	石庖丁様石器について
Sub Title	Abrasive implements of late Jomon culture
Author	鈴木, 公雄(Suzuki, Kimio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.1/2 (1970. 5) ,p.53- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	今宮新先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700500-0057">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700500-0057</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 石庖丁様石器について<sup>(1)</sup>

鈴木 公雄

## 一 序

関東地方の縄文文化後期末から晩期にかけての遺跡より、砂岩製の扁平な磨製双刃石器が出土することは、かなり以前から知られていた<sup>(2)</sup>。この石器は、その形状からして石庖丁様石器とか或は石庖丁類似石器とか<sup>(3)</sup>、有溝研磨器などと呼ばれており、その用途についても一応考えられてはいたようだが、今日までの所あまりとりたてて論じられることがなかった。筆者は千葉県山武郡姥山遺跡の発掘調査を契機として、関東地方の晩期縄文文化の研究をすすめていくなかで、これらの石器のいくつかに接することが出来、以来興味を引かれ類品の探索を行って来たが、このたびそれらの資料の一部を紹介し、二・三の点について考えてみたいと思う。なお資料の所在、実測及び文献等については佐原真、小林三郎、中村嘉男、川崎義雄、赤沢威、藤村東男、鈴木道之助の諸氏、ならびに東京大学理学部人類学教室、明治大学考古学研究室の各位に種々有益な御教示をいただいた。ここに記して感謝の意をあらわしたい。

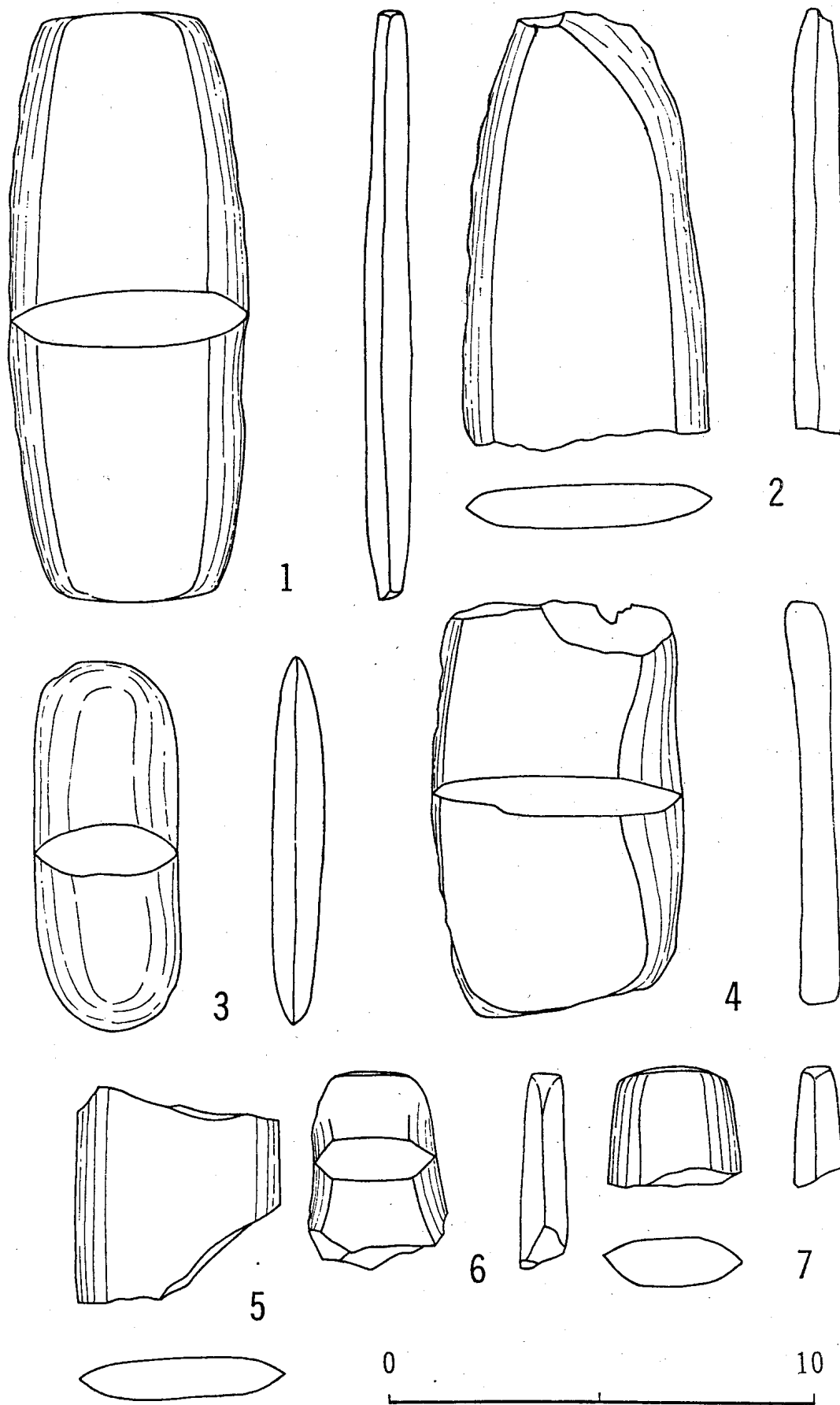
## 二 形 態

本石器は、第1図1にも示したように、磨製で、全体が長方形状をなし、相対する長辺にそれ／＼二つの刃を作出する

石庖丁様石器について

(五三)

五三



第 1 图

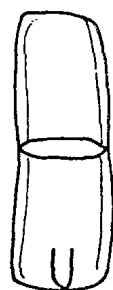
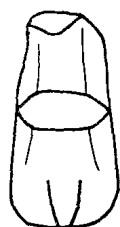
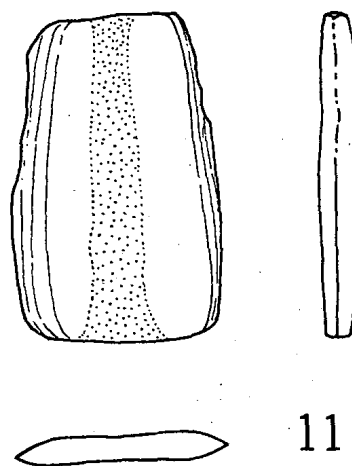
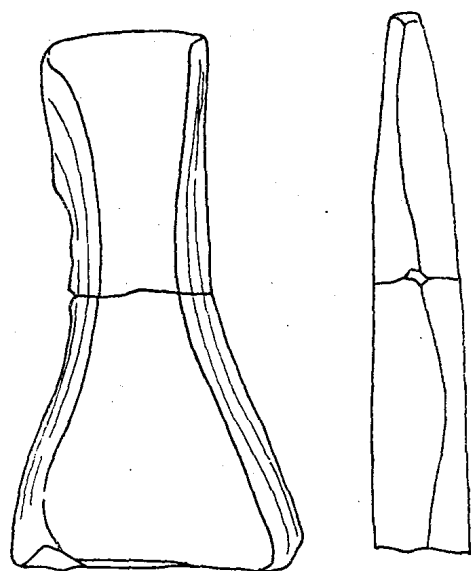
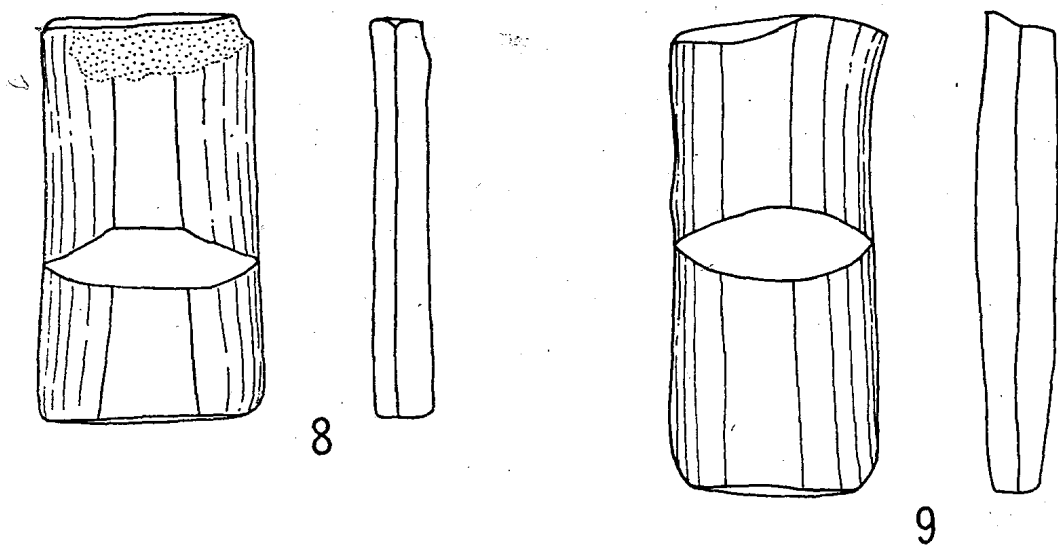
こと、その刃は両側からとぎ出される両刃タイプであること、扁平な身でそこに孔を持たないことなどを基本的な特徴とする。<sup>(5)</sup>今回はこれらの類品を、刃部の形状を一つの規準として、①外湾刃型、②直刃型、③内湾刃型の三つに類別したいと思う。

### ① 外湾刃型

その名の如く平行する二つの刃が共に外湾し、全体の形状は長い三味線胴のような張りをみせる。刃のほどこきれない他の二辺は、すり切られたように整形されているものが多く、なかには一方の端が折り取られたような状態を示すものもある。身は断面が凸レンズ状になる例もあるが多くの場合、うすく扁平であり刃断面は両側からとぎ出した蛤刃状をなすものが多い。身は断面が凸レンズ状になる例もあるが多くの場合、うすく扁平であり刃断面は両側からとぎ出した蛤刃状をなすものが多い。第1図1に示したものは埼玉県真福寺遺跡出土例（東大人類学教室蔵）で、外湾刃型の特徴をそなえた完形品である。長さ十三・八糎、幅五・七糎という数値は、この種の石器のなかで筆者が計測しえたものとしては最も大形の部類に属するものである。本石器の一般的な大きさは、破片からの復元を加えても長さ十五糎、幅六糎を越えるものはおそらくないのではないかと思われることは第1図2に示した同じ真福寺遺跡出土例からみても誤りない所であろう。

### ② 直刃型

長辺に作られる二つの刃がほぼ直線をなして平行するものである。全体の形状は長方形かやや一方の端がひらいた形となる。長さ、幅の数値は先の外湾刃型よりもやや小さめになるようで、長さ十糎、幅四糎前後のものが最も大きい部類に入るとみられる。身の断面形は、外湾刃型のように扁平のものも存在するが、第2図9に示した姥山遺跡出土例に典型的にみられるような、断面が凸レンズ状をなすもの<sup>(6)</sup>、あるいは第2図11にみられる上貝塚出土例のごとく、身の中ほどに浅い溝状のくぼみを有するものなど<sup>(7)</sup>、いくつか注目すべき変化がみとめられる。身の変化に応じて刃部も蛤刃状をとるも



12

13

14

15



第 2 图

の(第2図9)や、身と刃を明らかに区別する稜を有するもの(第2図8・姥山遺跡出土例)などが存在する。刃部以外の他の二辺の加工は、外湾刃型と変らない。第1図3に示した真福寺遺跡出土例のように、周辺の全体にわたって刃が作出されている例は、むしろ例外的な存在であるらしく、これに類するものは、茨城県女方遺跡の弥生式ピット出土例<sup>(9)</sup>以外あまり知られていない。

### ③ 内湾刃型

長辺に存在する二刃が内側にくり込んで内湾するものである。全体の形状は先の直刃型を基本としていたらしく、内湾刃のためそれが鼓形ないし丈の高いくびれた台形をなす。長さと幅の数值は直刃形にほど近く、概して小形品が多いようである。身の断面形は凸レンズ状をなすものよりも扁平なものが一般的であり、刃断面は蛤刃状をなすもの、身と刃の境いに稜を有するものの両者が存在している。第2図10に示した加曾利南貝塚出土例は内湾刃型の極めて著るしい例である<sup>(10)</sup>が、本例のようなものはむしろ例外的存在で、むしろ埼玉県石神貝塚出土例(第2図15)<sup>(11)</sup>ていどのものがむしろ一般的なものであろう。ただし、厳密に言えば、②の直刃型との類別が困難なものもあり、この点については後段で改めて本石器の用途と関連してとりあげることになるが、結論から云えば、この内湾刃型は、直刃型がたび重なる使用によって刃が磨耗してしまった結果を示すものと考えられるものであり、その意味ではこれは直刃型に含めてしまっても良いものではないかと思われる。

以上本石器を主として刃部の形状からして大略三類型に分けて整理を行ったが、もち論これは形態に基く便宜的な分類に止る面がつよい。これらの類型の他にも、たとえば茨城県殿内遺跡出土例<sup>(12)</sup>のような不定形のもの、埼玉県奈良瀬戸出土例<sup>(13)</sup>、茨城県女方遺跡弥生式ピット出土例(第2図13・14)のようなほそ長いへら状をなすものなども存在するわけであって、この三類型が本石器の用途等々に起因するの否かは、にわかに決定することは出来ない。又刃部の作出方法が、身

と刃部の境いに稜を有するものと、それを持たない蛤刃状のもの二者があっても、それが必ずしも身の断面形である、扁平か凸レンズ状かという特徴と、一定の相関にあるとはいまの所速断出来ないようである。さらに身の両面にみとめられる浅い溝状のくぼみも他の形態的特徴と一定の関係にあるとは思えない。ただ、先にも述べたように、本石器の全てが身に孔を持たないこと、わずかの例外を除いて原材に砂岩質の岩石を用いていることは注目してよく、特に石質にみられる斉一的傾向は、石棒、石剣のような片岩質ないし粘板岩質の岩石を用いるものとの間に、細片といえども明らかな識別をつけることが出来る。されに、この砂岩は、赤褐色、灰白色など色調においては多少の変化はあっても、その硬度はかなり高く、指でこすって砂が付着するような軟度のものは管見した所では加曾利南貝塚出土例の一小破片(14)にみられるのみであり、多くは石斧に類する硬度を持っている。また含まれる砂粒の大きさは全体として荒砥に類するものであり、これらの諸特徴は本石器の使用目的と無関係のものではないと考えられる。

### 三 分布及び所属年代

現在までに明らかにされた本石器出土遺跡をまとめてみると第1表のようになる。これによると十六遺跡三十六本以上の出土が認められるが、この他未発表資料等を加えるとおそらく六〇〜七〇本ていどが現在までに知られているとおおよその数であろう。本石器は作りも簡単で多くは破片の状態で出土する所から、発掘時に他の石片や土器片と共に収納されてしまうことも十分考えられるので、いずれにしても今後その出土例は増加すると思われる。

出土遺跡を一覧して直ちにわかることは、千葉県、埼玉県、東京都といった所謂南関東地方にその分布が集中している点であろう。関東地方以外では、新潟県西蒲原郡分水町幕島遺跡(15)よりの一例があるのみで、関東に隣接する東海・中部・東北南部等の地方からの出土例は明らかでない。北関東地方については今後多少の類品の発見がありうると思われるけれ

第一表 石庖丁様石器出土遺跡一覽表

番号	遺名跡	数量	時期	備考
1	千葉県 上貝塚	1	安行Ⅰ式	表面採集
2	" 岩井貝塚	1	安行Ⅰ式	
3	" 加曾利南貝塚	2	晩期前半	
4	" 余山貝塚	1	安行Ⅱノ姥山Ⅵ式	野口氏教示
5	" 姥山遺跡	6	安行Ⅱノ姥山Ⅵ式	
6	埼玉県 真福寺遺跡	5	晩期前半ノ中葉	東大人類蔵
7	" 石神貝塚	1	安行Ⅲ式	
8	" 奈良瀬戸遺跡	11	安行Ⅲ式	
9	東京都 下沼部遺跡	1	註(29)	吉田格報文
10	" 大森貝塚	1		
12	" 大泉寺山遺跡	1		吉田氏報文
13	茨城県 女方遺跡	2	弥生中期	
14	" 前浦殿内遺跡	1	晩期後半?	
15	" 上高津貝塚	1		
16	新潟県 幕島遺跡	1	緒立式?	表面採集

なお、同様の石器の出土が認められたと云われる遺跡として以上の他に千葉県上新宿貝塚・同貝ノ花貝塚・神奈川県下原遺跡などがあるが詳細は不明である。

る。その他関東地方の初期弥生式墳墓址と複合する晩期遺跡という、やや特異な出土例として茨城県殿内遺跡出土例、同県女方遺跡出土例の合計三つがある。前者は弥生式のピットから出土したのではなく、包含層よりの出土であり、そこ

石庖丁様石器について

ども、関東以外の地方については今後共その発見は望みうすであろう。おそらく本石器の分布は、関東地方特にその南部に中心をおくものとみて誤りないだろう。

所属時期についてみると、発掘調査により土器との伴出関係が明らかかなものの中で最も時期的に遡る例は、第2図12に示した岩井貝塚出土例で安行Ⅰ式に伴うものである。<sup>(16)</sup> 安行Ⅱ式ないしⅢ式に伴ったものとしては、第2図15の石神貝塚出土例、第2図9の山武郡姥山遺跡出土例などがある。姥山Ⅱ式、同Ⅲ式といった晩期前半の土器に伴ったものとしては第2図9の加曾利南貝塚出土例がある。広義の安行Ⅲ式に伴ったものとしては、埼玉県奈良瀬戸遺跡出土例がある、前浦式に伴う例は現在までの所まだ明らかではないが、晩期終末期に伴うものとしては、第1図6・7第2図8の山武郡姥山遺跡出土例があ



から出土する縄文式土器の大部分は、前浦式以降の終末期縄文式土器であり、ほゞその大略の所属時期を推すことが出来るが、<sup>(17)</sup> 女方遺跡の場合は、その二例共明らかに弥生式土器と共伴関係にある。すなわち、第十五号堅穴と呼ばれたピットにおいて、弥生式土器十個体、剝離石片若干と共に堅穴中央部から出土している。<sup>(18)</sup> 田中国男氏によれば二例とも鉄丹による塗彩が施されているというが、これは他に類を見ないものであり、その出土状況と深く関係するものと思われるが、刃部の状態等からして、あるていどの使用を経過したものであることは、報文中の写真による観察ではあるがうたがない。又田中氏はこの二例の石器を粘板岩製とされているが、これも写真による限り硬砂岩系の岩石とすることも不可能ではないように思われる。いずれにしてもこの女方遺跡出土例は、時期的には最も下降したものであり、しかも弥生式土器と伴出したという点で注目すべきものである。報文では幅広の大形品に対して「石庖丁」、幅のせまいやや小形品に対して「笏形石製品」と名づけ、後者は非実用品であろうとしているが本稿の分類によればいずれも②直刃型に含まれるものであろう(第2図13・14)。この他、新潟県幕島遺跡出土例は、表土層よりの出土という点から信頼性に欠けるうらみはあるけれども、表土層から緒立式類似の土器の出土が報じられており、報告者も又本石器が緒立式に伴うものとしている。<sup>(19)</sup> とすればこの幕島遺跡出土例も先の女方出土例と共に、最も下降した時期に属するものになるとみられる。

以上のような発掘調査によって出土した類品からみて、本石器の所属年代の幅は安行I式以降晩期終末ないしは関東地方初期弥生式のころまでの間に求めることが出来る。さらに表面採集資料その他時期についてあまり明確にしないものも、真福寺遺跡・下沼部遺跡などからわかるように、それぐの遺跡の大まかな時期からして晩期に属するものであることは誤りないと思われる。そしてこれらのうちで、晩期前半中葉にかけてのものが多し所からして、その盛行期もそのころを中心とするものとみられよう。

#### 四 形状からみた用途の推定

本石器の用途に関しては、すでに「石庖丁様石器」あるいは「石庖丁類似石器」とか「有溝研磨器」などと呼ばれていることからわかるように、石庖丁に類する用途を考えるものと砥石のような用途を考えるものの二者があるようにみられる。農具として考えるものの代表は江坂輝弥氏であって、氏は本石器が穂摘み具である可能性を持つと考え、縄文時代晩期の関東地方においては、雑穀の栽培が開始されていたのではないかと想像している<sup>(20)</sup>。たしかに本石器のうちで①の外湾刃型と弥生式石庖丁との形態上の類似は認められないわけではないが、形態の類似は必ずしも用途の一致をも示すものでないことは、かつて弥生式石庖丁が、エスキモーの調理用ナイフと対比されたことを思いおこせば明らか<sup>(21)</sup>に、これをもってただちにアナロジの成立とはみなしがたい。

本石器において、その大きさが幅六糎、長さ十五糎を越えるものは現在の所知られていないが、この長さ<sup>(22)</sup>と幅のマキシマムは、弥生式石庖丁のもつ数値のマキシマムとほぼ一致する。ミニマムにおいては弥生式石庖丁より小形品となるものが存在することはたしかであるが、以上の点は本石器が、その大きさからみて掌中に保持して使用されたものである可能性を強く示すものであろう。この場合弥生式石庖丁と異なる点は、双刃であること、無孔であることの二点である。双刃であることは、この石器が掌中で使用される場合に都合が悪いと考えられないことはないが、刃そのものは図によってわかるようにそれほどシャープに作出されてはいないから、双刃であることが掌中での使用を不可能にする決定要因ではないと思われる。もし本石器に何らかのかたちで着柄がなされたとすれば、双刃に平行に骨ないしは木にはさみこむようにするか、或はすり切られたような両端部に樹皮、縄、皮類などを巻きつけるとかすることが予測される。しかしこのような着柄は、身が扁平なもので長さのかなりあるものについては想定しうるとしても、身の断面がかなりあつくしかも凸レ

ンズ状をなしている第2図9のようなものや、身じしんが短いものなどについては、あまり有効な方法とはいえない。現在までの所本石器にそのような着柄ないし加工がなされたとする証左は、身の部分の肉眼観察からはみいだすことが出来ない。又本石器が例外なく身に孔を持たないという点に関しては、次の二つの理由が考えられるだろう。一つは孔をあけることが、本石器の基本的用途と抵触するものであったかどうかという点で、いま一つは、これが携帯のさいの必要性からであったとするならば、本石器に孔がないのはそうした携帯の必要がなかったのではないかという点である。

孔を有することが本石器の用途と抵触するという場合についても、それが孔をうがすべき部分が着柄されることによつて孔そのものを必要としなくなるという解釈もなりたつがこの点は先にものべたように、本石器にはおそらく着柄はなされなかったであろうと考えられることから、このさい除外して考えたとすれば、残された可能性は本石器が刃部以外に身の部分も使用されるような用途を持っていたのではないかという点にある。この点で本石器の多くが荒砥に類する砂岩質の岩石を用いているという材質の齊一的傾向は重要な意味を持つ。さらに本石器のうちのいくつかは、身の部分に浅い溝状のくぼみを有するものがある。このくぼみは矢柄研磨器のようなはっきりした溝ではないが、そこで何か棒状のものといたことを否定するものではない。もしそのような目的をも本石器が持っていたとすれば、身に孔をうがつことは明らかに本石器の基本的用途と抵触することになる。孔と携帯との関係についても、孔がないということは、本石器を用いてある作業を行う途中で、一たん手からはなして別の作業をするという場合にも、さしたる不自由がなかったことを示唆するものといえ、このことは、本石器を持って作業を行う場合、その人間があまり移動するような状態で作業をしていなかったのではないか、換言すればその作業が野外で行われるものではなかった可能性を示すものとして理解されるだろう。

以上のようなことからして、本石器の諸特徴は、本石器がおそらく着柄の為の加工をほとんど必要とせず掌中に保持し

て使用されるものであり、その使用にさいしては二つの刃部のみならず身の部分をも使用されるような場合が十分に考えられること、さらにその作業は、屋内かあるいは聚落内の一定の場所でなされるような性質のものであったことを想定せしむるのである。

本石器の使用目的をおおよそ以上のような点にしばって考えてみて、次に問題となるのはかかる作業の具体的な内容はいかなるものであったかということであろう。これは先にも少しくふれておいた身の部分に残された浅い溝状のくぼみと、刃部の磨耗のありかたがさしあたっての手がかりとなろう。本石器のなかで刃の磨耗がきわめて進んだものとしては第2図10の加曾利南貝塚出土例、第2図15の石神貝塚出土例などがある。これらはいずれも③の内湾刃型としたものに入るのであるが、これらは刃が本来内湾状に作出されていたとするよりもむしろ。第2図8のような直刃型として作られたものが、たび重なる使用の結果このような刃の内湾を来したものとみられる。特に加曾利南貝塚出土例では、その結果中央部より二つに折れてしまっていることがこれをよく示しているのであり、このようなものに近い破損のしかたをしている例は他にも認められる。石神貝塚出土例でこの点をさらにみてみると、刃の中央部の約三糎ほどのみ内湾しているの<sup>(23)</sup>であって、このような刃の磨耗を引きおこす使用のしかたは、おそらくその内湾してしまつた幅三糎程度の部分のみに特に加工対象物があてられていたと考えざるをえない。このような点からみて、本石器は、刃全面をくまなくまんべんに使用するような用い方はあまりとられなかつたのではないかと思われるのであり、これは第1図1のような大型の外湾刃型にあつても、ほゞ同様の局部的な刃の磨耗がみられる点からも理解される。さらに第2図10の加曾利南貝塚例のように、刃のへりかたが二つの刃ともほゞ同じように認められることは、二つの刃とも同じような加工目的に対してまんべんなく用いられたことを考えさせると共に、内湾刃型は本石器の本来の形態でなくおそらくはたびかさなる刃部の使用によつておこつた結果を示すものであらうとみられる。このような両刃に共通した刃部の磨耗のありかたからして、本石器と加工対

象物との関係は、加工対象物が刃部の一部に動きつつ接触するか、或は刃部の一部しか加工対象物に接しないような使用のされかたであったと思われる。そしてその加工対象物の大きさは、長さはともかくとして、その太さないし幅は、刃長の半分以上のものであったのではないかと思われる。このようなことから導き出される加工対象物は、板状のものではなく、おそらく棒状のものなら径五糎以下のもので、しかもかなりの硬度を有するものも含まれていたとみられる。

以上のように想定される加工対象物としては、骨・角・木材などといった素材が一応考えられる。もちろん石などもまったたく考えられない訳ではない。骨・角の場合は研磨・削り取りなど、木製品の場合もほぼ同様であろう。石を対象とした場合はおそらく研磨であろうか。本石器の形態からしてそのいずれの素材でも加工可能であろうと思われる、実際そうしたいろ／＼な素材が用いられたのかも知れない。これ以上に本石器と加工対象物との関係を限定することは、肉限による観察からでは限界があるけれども、そのような点は石器刃部の微視的な観察によって明らかにする方法がすでに知られており、そのような方法に基づかないかぎり、今後の石器の用途解明なり、そのテクノロジカルな分析を行いな<sup>24</sup>いことは明らかで、そうした分析の結果に立って、初めて本石器の使用目的も又はっきりとさせることが出来るものである。従って本稿においては、本石器の形態的な面からする観察にもとづき、そこから想定しうる使用方法と、加工対象物の推定にとどめ、将来の研究にまつこととしたい。

## 五 結 語

所謂石庖丁様石器と呼ばれるものについてその形態・分布・所属年代等を取りあげつつその性格の一部についてのべて来たが、それらは左の如く要約される。

① 石庖丁様石器は、刃部の形状からみて外湾刃型・直刃型・内湾刃型に大別されるが、基本的形態は外湾刃型と直刃

型の二者であったとみられる。

② これらの石器は、ほゞ矩形をなし、相対する長辺に二つの刃を作出すること、身に孔を持たず石質は砂岩系の岩石を好んで用いることなどを共通の特徴としている。

③ 分布についてみると、関東地方南部を中心としており、新潟県に類品が一例あるほか現在の所関東近辺の東海・中部・南部東北に及ぶものではない。土器型式の分布との関係を見ると、安行系土器の分布と複合するようである。

④ 所属時期は後期末に属する一例と、弥生式ピット内出土の二例を除けば、ほゞ晩期に属するものであるが、特に盛行したのは晩期前半～中葉であるとみてよい。

⑤ その用途等については、石器の形態・形状からみて掌中に保持して使用され、加工対象物との関係についても、ほゞその大略を探り得たが、その明確な把握に関しては将来の徹視的な観察に待つべきものがある。

これらを通じてまず問題となるのは本石器が、関東地方晩期に特有なものであるということである。これは本石器の用途がいかなうなものとなるうと変ることがない。仮に骨角器製作具であったにせよ、木工具の一種であったにせよ、或はその可能性がひくいとはいえ一種の農耕具であったにしても、それが何故に晩期の南関東地方に集中的に出現して来たのかという問題は、いぜんとして残ることになる。このような特異な分布を示す資料は本石器以外にも関東地方晩期縄文文化の中に実はいくつか存在することが知られている。たとえば、一部で「有孔土製円板」ないし「有孔円板状土製品」と呼ばれるものがある。<sup>(26)</sup>これは径十糎前後、厚さ一～二糎で、中央に一糎前後の孔を有し、さらにその周辺に径一～二ミリの小側孔を有するもので、中には中心孔を中心として文様が描かれるものもまれにはある。用途については土器の蓋であろうと云われたこともあるが、明確な所は決し難い。この土製品の所属時期、分布共に本石器と極めて類似した様相を示している。いくつかの遺跡からは両者が共伴している例も知られている。本土製品も又関東以外の周辺の晩期遺跡から

の出土はみられず、分布的には孤立している。さらにこれに類するものとしては、所謂「製塩土器」がある。これは東北地方に類品が存在し、かつ関東地方内での存続時期が、後期末〜晚期前半に集中するといううちは多少持っているが、関東以西の晚期遺跡においては存在せず、かつまた関東地方内部での分布が、南関東地方東部に集中偏在している点では、先の二例と共通する要素を持っているといえよう。<sup>(27)</sup>

関東地方晚期縄文文化においては、以上のべたような関東以外の地域にあまり類をみない特異な遺物が存在し、しかもそれらはさらに関東地方での細かな地域差を反映するかの如く偏在的な分布を示している。このような点に注目してみると、全体的な分布においては問題はないとしてもたとえば石鏃などにみられる南関東地方西部と東部における石鏃生産量の変化、貝輪生産における南関東地方東部のはたした役割りなど、<sup>(28)</sup>いくつかの問題とすべき傾向が生まれていることが知られるのである。このような状態というものは弥生文化の成立前夜ともいうべき関東地方晚期縄文文化の動向を、おそらく反映しているものであることはたしかであり、そこに又関東地方独自の地域性が認めることが出来るものである。石庖丁様石器といわれるこの石器に関しても大局的にはそのような状況の中でとらえて理解されねばならないものといえる。

(一九六九・一〇・二稿)

註

(1) ここに「石庖丁様石器」という名称を用いたのは、故酒詰仲男氏の命名を踏襲するものである。酒詰氏は、人類学講座第六巻、第三部「日本及び隣接地の先史学」の中の「本邦先史石器類概論」(昭和一五年)と題する論文において、初めて本稿でとりあげようとする石器を「石庖丁様石器」なる名称を付し、その用途等を論じた。氏はこの「石庖丁様石器」を、弥生

式石庖丁の祖型であろうとされるが、その結論する所はともかく、学史的にはこの名称が初めて付けられているので、本稿においてもその名称を一応採用しておくことにした。

(2) 大町四郎・片倉修「下総岩井貝塚」——特に安行式土器に就いて——先史考古学一ノ一  
吉田格「埼玉県石神貝塚調査」人類学雑誌五五ノ一一 昭和一五年、酒詰仲男「本邦先史石器類概論」人類学先史学講座 第

六卷 第三部「日本及び隣接地の先史学」(所収) 昭和一五年

(3) 吉田格「前掲論文」

(4) 大宮市教育委員会編「奈良瀬戸遺跡」昭和四四年

(5) 筆者の検討しえた資料の全ては、双刃を有するものであるが、先の酒詰氏の論文では「一側面に刃の付いた一種の石庖丁様の砂岩製の石器」というものがあるといわれ、又その略図も示されている(出土地不明)。してみると、本石器の中には刃が一つしか存在しないような例もあることになるが、おそらく稀なケースなのではないかと思われる。

(6) 安行Ⅲ式石器に伴うものとみられる。

(7) 表採資料で、時期については明確にしがたい。

(8) 姥山Ⅴ式包含層より出土

(9) 田中国男「縄文式弥生式接触文化の研究」昭和一九年

(10) 加曾利南貝塚第十一区50-61・49-61グリッド 黒色土層出土。

(11) 吉田格「前掲論文」

(12) 杉原莊介・戸沢充則・小林三郎「茨城県殿内(浮島)における縄文・弥生両時代の遺跡」考古学集刊四一三 昭和四四年

(13) 大宮市教育委員会編「奈良瀬戸遺跡」昭和四四年

(14) 加曾利南貝塚 14-49グリッド 黒褐色土層出土

(15) 分水町教育委員会編「幕島——新潟県分水町幕島遺跡調査報告——」昭和三九年

(16) 大町四郎・片倉修「前掲論文」

石庖丁様石器について

(17) 杉原莊介他「前掲論文」

(18) 田中国男「前掲書」五頁、五八頁、図版第四三参照

(19) 分水町教育委員会編「前掲書」

(20) 江坂輝弥「日本文化の起源」講談社現代新書、一五〇頁、昭和四二年

(21) 中谷治宇治郎「校訂日本石器時代提要」昭和十八年

(22) 小林行雄・佐原真「紫雲出——香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究——」昭和三九年

(23) 石神貝塚出土品に関する吉田格氏の報文中では、石器の大きさにについての記録がないが、同一図版に組みこまれた骨角器の数値から類推し、又他の類品の場合を参考として、ほぼそのように考えられる。

(24) S. A. SEMENOV: Prehistoric Technology. London 1964 Translated, and with a preface by M. W. THOMSON. 田中琢抄訳 S・A・セシヨノフ「石器の用途と使用痕」考古学研究一四ノ四 昭和四三年

(25) 野口義麿氏の御教示によれば、余山貝塚出土の本石器に関して、山内清男氏は骨角器製作用具的な用途を考慮しておられるとのことである。

(26) 岩崎卓也「有孔円板形土製品」大塚考古 六 昭和四〇年  
西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚」古代 三六号 昭和三六年  
杉原莊介他「千葉県天神前遺跡における晩期縄文式石器」駿台史学 一五 昭和三九年 この他奈良瀬戸遺跡、群馬県初網遺

(六七)

六七



跡、山武郡姥山遺跡、松戸貝ノ花貝塚、殿内遺跡などから出土している。

(27) 寺門義範・芝崎のぶ子「縄文後・晩期にみられる所謂『製

塩土器』について」常総台地 四 昭和四四年 鈴木公雄「関

東地方晩期縄文文化の概観」歴史教育 一六ノ四 昭和四三年

(28) 西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚——東部関東地方縄文文

化終末期の研究——」古代 三六号 昭和三六年

同「関東における縄文式最後の貝塚」科学読売 一七ノ一〇

昭和四〇年

(29) 下沼部貝塚出土品として、京都大学「考古学資料目録」1

一一二頁の131に本石器に類似するものがある。説明によると

「微粒砂岩製、扁平な紡錘形で石庖丁に似ているが刃はつけられていない。中央より折損。現長7cm」とある。これが吉田氏の

報告したものと同一物であるかは不明である。なおこの他にも千葉県天神台貝塚出土のもので、報告書には「有肩石斧」と記

載されているものがある。写真による限り、本石器に類するものと思われる(粗砂岩製)が、実査の機会を得ていないので保

留しておく。早稲田大学考古学研究室報告 第八冊「印幡・手賀」所収 昭和三六年

〔付記〕 第2図12(岩井貝塚出土例)、同13・14(女方遺跡出土例)の三つは、報告書の図版より直接引用したものであるので、縮尺が異っている。